文句ばあさん　その2

近藤せいけん

文句ばあさん　その２

帰宅後、弟を連れて文句ばあさんの家を訪ねました。
「こんにちは。こんにちは」
と玄関前で大きな声で呼びかけました。ところが何度呼んでも、しんとしていて返事がありません。
庭のほうへ回りました。そこはかなり広い畑になって、トマト、キュゥリ、ナス、ピーマン、トウモロコシ、カボチャなど色んな作物が植わって　いました。
もう一度「こんにちは、こんにちは、おばあさん～」と呼びかけました。すると、背の高い、トマトの柵のかげから「はい～」と返事がありました。
おばあさんがタオルで手を拭きながら、ニコニコ笑って出てきました。
「よく来たね、あけみちゃん」
「弟の勇太です」
「こんにちは、おばあさん」
「はい、こんにちは。よく来たね」
「今、畑でトマトを採っていたのよ。おいしいトマトが採れたよ」
「さあ、さあ。縁側にお回り、お茶にしましょう」
縁側に回ると、奥の座敷におじいさんが臥せっていました。
「こんにちは、おじゃまします」
「こんにちは、おじいちゃん」
「はい、こんにちは、ばあさんから聞いていた、あけみちゃんだね」
「はい、あけみです。こっちが弟の勇太です」
「さあ、おかけなさい。ばあさんがすぐ来るからね」
おじいさんはフトンが出てきて、縁側に座りました。
おばあさんが、採れたての輪切りにしたトマト、すいかをお盆に載せて入ってきました。
「さあ、食べましょう。お塩を振るととても美味しいのよ。沢山、食べてね」
おじいさんも起きてきて、一緒に食べました。

「自己紹介するね、おじいさんの名前が林　庄吉、私がかねよ」
「おじいさんは昔、大学の先生をしていたの。私は看護婦さんをしていたの。ずいぶん昔だけど・・・」
「一人息子がいたのだけど、ずうっと昔、病気で亡くなってしまったの」
「それから、じいさんと二人暮らし・・・」
「さあ、さ、昔話しはこの辺にして。食べましょう」
「ところで、あけみちゃんは将来、何になりたいの？」
「ばあさん、ばあさん、こんな小さい子がまだ、将来のことなど、考えていないよ。」
「あら、そうかしら」
おじいさんも、ばあさんもニコニコ笑いながら、二人の幼子を暖かい視線で見守りました。
あけみちゃんがおじいさん、ばあさんを見つめ、静かに口を開きました。
「私、将来。お医者さんになりたいの」
「そう、どうしてお医者さんになりたいの？」
「はい、いろんな病気で苦しんでいる人を治してあげたいの。働いているお母さんが病気にならないように、守ってあげたいの」
「ほう、それはいい。立派な考えかただ。がんばればきっとなれるよ」とおじいさんが言い、ばあさんもうなづきました。
「ぼくはねぇ、トラックの運転手になるんだ」
「大きい、こんなに大きいトラックに乗るんだ」
「それはいい、とてもいい。きっとなれるよ、ワハハ、ハハ」
「そうよ、二人がガンバレばきっとなれるは、オホホ、ホホ」
「そうか、そうか、いいことだ、ワハハ、ハハ」
四人に、和やかな優しい初夏の風が吹き通っていった。